

観光学部での学びを活かした「社会・地理歴史科教育法」 の授業実践

太田 正行

1 はじめに

筆者は、2012年度立教大学新座キャンパスで「社会・地理歴史科教育法」を担当した。02年度から慶應義塾大学で「社会科公民科教育法」を担当しているが¹⁾、立教大学では初めてとなる。慶應義塾大学では、教科論を主な内容とする「社会科・公民科教育法Ⅰ」、授業論を主な内容とする「社会科・公民科教育法Ⅱ」、教材論を主な内容とする「社会科教育法特殊」が設置されている。高等学校での授業経験を活かし「社会科・公民科教育法Ⅱ」を10年以上担当してきた。立教大学では「社会・地理歴史科教育法1」「同演習1」「社会・地理歴史科教育法2」という3科目を担当することになり、これらの授業内容を検討した。立教大学教職課程では「教科教育法」の必修単位は8単位となっており、「教科教育法1」(前期)は教科教育論や教材研究方法など、「教科教育法演習1」(後期)は模擬授業を中心とする実践演習で、受講者一人一人が1回模擬授業を経験し、「教科教育法2」(後期)は教材研究を深化させ、教材開発に基づく模擬授業を行うなど「1」「演習1」での学習成果をさらに発展させる科目である。筆者は、長らく学校現場で多くの実習生を受け入れ指導してきたが、大半の学生は熱心に取り組み実習を終了できたが、大学における実習生指導の不十分さを実感することも多かった。そこで、大学における教科教育法はできるだけ授業実践を重視す

る内容とし、授業形式としては学生に一方向的に講義することはできるだけ避け、受講生が自らの教材研究に基づき指導案を作成、模擬授業ができるような授業計画を作成した。また、模擬授業については、生徒役の受講生全員に必ずコメントを書かせ、それらを次回の授業で全員にフィードバックする方法を継続している。これにより、他の学生の模擬授業を観察し評価することで、自らの授業を振り返ることができ、より良い授業を行うことができると考えている。

以下、筆者が担当した3科目の授業実践の概要を述べてみたい。

2 「社会・地理歴史科教育法1」(前期)の授業実践

この科目の受講生は、指導案の作成や教材研究、教材作成、板書や発問などを行う模擬授業を未だ経験していないことを前提に授業を進めた。第1回はガイダンスとして自己紹介を行い授業の概要と教科書等について説明した。また、学生自身の中学校・高等学校での社会科等の授業を振り返るアンケート²⁾を記入してもらった。第2回は前回のアンケート集計結果と社会科等に関する中高生意識調査結果³⁾を資料として、自らが経験した授業と中高生の意識調査結果を対比させた。学生のアンケートでは、①中学校で好きな分野は「歴史」が多数を占め、②高等学校の授業は大半が板書や穴埋めプリントを使

用した講義式、③学生が目指す授業は、生徒の興味・関心を高める、退屈しない面白い授業、グループワークや発表を取り入れた授業、学習意欲を高めるような授業、生徒に考えさせる授業などが挙げられていた。また、中高生意識調査結果によると「社会科等の勉強が好き」な生徒の割合は中学校では多いが高校では少なく、「社会科等の勉強は大切」は、小学校で8～9割、中学校で約7割、高校では5～8割（「世界史B」が5割、「政治・経済」が8割）となっている。また、「社会科等の授業がどの程度分かるか」では、「よく分かる」+「だいたい分かる」で、小学生7割、中学生5割、高校生は科目の差はあるが約4割。校種が上がるに従い好き、大切、理解度は低下する。受講生からは「実生活との結びつきが強いので勉強は大切だと考えられるが、分かりやすさに直結していない」「生徒は大切だと思っているが理解度が低いのは、授業を改善する責任が教師にある」「勉強の楽しさを伝えられるような授業を展開したい」「なぜ

この勉強をするのかを提示したい」などのコメントが寄せられた。第3回はどのように模擬授業をするかを把握させるため、「教育実習生の授業・中学校社会科地理」のDVD⁴⁾を視聴した。この映像教材は、ある教育実習生が公立中学校1年生に行った社会科地理的分野の授業で「西アジア」を扱ったものである。公立中学生の実態を知ること、実習生が行なった教材研究や教材の工夫、発問や板書の仕方など、授業の進め方を実践的に学ぶことができた。第4回及び第5回は、筆者が中学校社会科の模範授業を行った。指導案を作成し主たる教材である教科書を使用して、発問や板書の方法を具体的に指導した。第6回から1コマ2名割り当てて模擬授業を行った。単元・テーマは自分で選び教材研究を行い、指導案を作成し授業するようにした。学生は新聞記事や穴埋めプリント、自作資料など各自工夫した教材を用意し模擬授業に臨んだ。授業者以外の学生は生徒役となり、さまざまな視点から評価しコメントしてもらった。コメント

「社会・地理歴史科教育法1」(前期) 模擬授業一覧 (受講生 12名)

	校種・教科・科目・分野	テーマ	備考
A	中学校社会科「歴史的分野」	世界恐慌とブロック経済	観光
B	中学校社会科「地理的分野」	ヨーロッパの自然	
C	中学校社会科「歴史的分野」	倭寇と東アジアの貿易体制	
D	高等学校地歴科「地理B」	生活の舞台となる集落の成り立ち	
E	中学校社会科「歴史的分野」	武家政権の成立	
F	高等学校地歴科「世界史B」	ローマ世界「内乱の一世紀」	
G	中学校社会科「歴史的分野」	世界とつながる日本と文明開化	
H	中学校社会科「地理的分野」	世界の地形のようす	
I	中学校社会科「歴史的分野」	鎖国下の対外関係	
J	高等学校公民科「倫理」	生命と倫理	コミ福
K	高等学校地歴科「地理A」	インド世界の歩みとヒンドゥー教徒の生活	
L	中学校社会科「歴史的分野」	冷戦後の国際社会	

備考：特記なき者は観光学部交流文化学科所属。

はできるだけ詳細に具体的に書かせた。教室で相互に批評することが理想だが、時間の関係でできなかったため、紙上で意見交換できるよう次回の授業ですべてのコメントをまとめて配布した。受講生は「模擬授業のまとめ」で、「授業に関して今回の反省や評価からさらによいものを目指し次に活かしたい」「皆がそれぞれの視点でくれたアドバイスはとてもうれしく、さらにもどのように直せばいいのか具体的に書いてもらえた」など感想が寄せられた。

授業評価アンケート結果によると、学生の授業への取り組み「この授業に積極的に参加した」が4.63の高評価であった。「自分で調べ、考える姿勢」を得ることができたが4.38、「この授業を受けて満足した」が4.63と高評価であった。一方的な講義式でなく、学生が自ら模擬授業をしてお互いに評価し合う授業形態が評価されたものと思われる⁵⁾。

3 「社会・地理歴史科教育法演習1」(後期)の授業実践

前期の「社会・地理歴史科教育法1」は自ら選んだ単元・テーマで模擬授業を行ったが、授業時数の関係で1人1回しかできなかった。他の学生からのコメントを活かして授業を改善する機会がなかった。そこで、後期「社会・地理歴史科教育法演習1」では、受講生12名、ほぼ全員が前期に模擬授業を経験していたので、すぐに模擬授業を行うことができ1人2回の授業をすることができた。テーマは、前期と異なり現在大学で学んでいる「観光」、「交流文化」に関連するテーマを選ぶよう指示した。第1～3回は、教室や図書館などでテーマの決定や教材

研究を行い、第4回より模擬授業を行った。

受講生はすべて観光学部の学生であるが、観光学部の学びを活かした模擬授業をすることには当初戸惑いが見られた。立教大学の観光教育は、1946年開設された「ホテル講座」に始まり、1967年社会学部観光学科、1998年にはこの新座キャンパスにわが国初の観光学部が社会学部から独立して設置された。2006年には観光学科に加え交流文化学科が設置された。観光学部は、法学部や経済学部などと比べ「観光」という複合的な現象を学際的にとらえようとする学部であり⁶⁾、学生の学習意欲は高い。この観光学部で教職課程を履修し教員免許を取得しようとする学生は、他の一般大学の教職課程の学生に比べて極めて熱心に模擬授業に取り組んでいた。受講生が取り上げたテーマにもこの学部の学際性、複合性が反映されている。観光とは、「楽しみを目的とする旅行」と「旅行とそれにかかわりをもつ事象の総称」の2つの意味を持つ⁷⁾。観光学科の視点である「観光産業の経営」「観光による地域活性化」、交流文化学科の視点である「文化的交流が人々の生活や社会に与える影響」「文化的影響を明らかにする地域研究」であり⁸⁾、これらの視点から地理や歴史のテーマを決め教材研究をして教材を作成し模擬授業を行うことにした。

学習指導要領では、社会科や地理歴史科と「観光」とのかかわりについてどのように記述されているか。中学校社会科「地理的分野」では、内容「(2)日本の様々な地域」の「ウ 日本の諸地域」の「(キ)他地域との結び付きを中核とした考察」で「観光地の成立と観光客の移動といった物資や人々の移動の特色と関連付けて追究

することが考えられる」⁹⁾とされている。高等学校地理歴史科「地理A」では、内容「(1)現代世界の特色と諸課題の地理的考察」の「ア地球儀や地図からとらえる現代世界」の「内容の取扱い」で、「国家間の結び付きについては、世界の国家群、貿易、交通・通信、観光の現状と動向に関する諸事象を様々な主題図などを基にと

らえさせ、地理情報の活用の方法が身に付くよう工夫すること」とされ、「『観光』を扱う場合にも、例えば、個々の観光地や観光動向よりも観光を軸とした国際的な人々の移動を通じた地域や国家間のつながりという視点からとらえさせるようにするなど工夫する必要がある」¹⁰⁾とされている。

「社会・地理歴史科教育法演習1」(後期) 模擬授業一覧 (受講生 12名)

	校種・教科・科目・分野	テーマ
A	中学校社会科「地理的分野」	九州地方・さんご礁の海を守る～観光開発と環境保全
B	高等学校地歴科「地理B」	身近な地域の調査・地形図の利用～新旧比較
C	中学校社会科「地理的分野」	東北地方・東北地方の生活舞台
D	高等学校地歴科「地理B」	アメリカ合衆国・広大な国土と自然
E	中学校社会科「地理的分野」	さまざまな宗教と人々の暮らし・世界の民族と宗教
F	高等学校地歴科「世界史B」	ナチスドイツとベルサイユ体制の崩壊
G	中学校社会科「地理的分野」	交通網の発達と地域の変化～新潟～
H	中学校社会科「地理的分野」	さまざまな民族と文化
I	高等学校地歴科「地理B」	観光地化が進むヨーロッパ
J	高等学校地歴科「地理B」	アメリカ合衆国・移民の国
K	中学校社会科「地理的分野」	宗教とともに生きる人々～ウズベキスタンの暮らし
L	中学校社会科「地理的分野」	ヨーロッパ文化の共通性

Aは、エコツーリズムの事例として沖縄県を取り上げ、観光開発を環境保全の視点で考察させる授業であった。

Bは、新旧の地形図を活用して、地形図に親しみ地域の変化を考察させる身近な地域の授業であった。取りあげた地域は自らがフィールド調査した地域であった。

Cは、東北の住文化である「曲がり家」を導入で使用し、東北の人々の生活の舞台となる自然環境の特色について学ぶ授業であった。

Dは、アメリカ合衆国の自然環境について、世界遺産を活用して地形を中心にまとめた授業であった。

Eは、世界の民族と宗教で、三大宗教を取り上げた授業であった。

Fは、ナチスドイツに関する授業であったが、導入でダークツーリズムが取り上げられアウシュビッツ見学などの観光を事例とした。

Gは、新潟県のスキーリゾート湯沢町の発展を、関越自動車道や上越新幹線の開通から考えさせる授業であった。

Hは、米国サンディエゴへの研修旅行で行った母語と移民経験の調査結果を紹介し、米国の移民や人種構成について考えさせる授業であった。

Iは、ヨーロッパに多い世界遺産を導入として、

ドイツとフランスの労働時間、バカンスなどからヨーロッパの観光について学ぶ授業であった。

Jは、米国留学時の移民の両親を持つ友人の写真を導入として、米国の発展と移民の歴史や人種別人口の推移、地域別人種分布などを考察させる授業であった。

Kは、旅行中に撮影したウズベキスタンの写真を提示し生徒の興味・関心を高め、メディアによる偏見についても触れながら、イスラム教徒の生活を紹介する授業であった。

Lは、国際観光客数や航空機国際便到着数などの統計を活用してヨーロッパの観光客数が多い背景に、言語や宗教、民族など文化の共通性があることに気付かせる授業であった。

4 「社会・地理歴史科教育法2」(後期)の授業実践

この授業では、模擬授業ではなく観光学部での学びを活かした教材作成を行うことを目的とした。中学校の学級活動や高等学校のホームルームなどで教育実習生が、大学で学んでいる内容について生徒が興味・関心を持てるよう紹介するという設定で教材を作成し授業をした。この発表は受講生それぞれの個性が明確に表れた。一方、観光学部ではフィールドワークが重視されていることから、身近な地域の調査や博物館の見学等教室外の授業を取り入れてみた。学習指導要領では、中学校社会科「地理的分野」の内容「(2)日本の様々な地域」の「エ身近な地域の調査」で「観察や調査などの活動を行い、生徒が生活している土地に対する理解と関心を

深めて地域の課題を見いだし」とあり、「歴史的分野」の「内容の取扱い」(1)カでは「博物館、郷土資料館などの施設を見学・調査したりするなどして具体的に学ぶことができるようにすること」とある。また、高等学校でも地理歴史科「世界史」「日本史」では、「内容の取扱い」の(1)イ「(地域の)文化遺産、博物館や資料館の調査・見学を取り入れたりするなどして、具体的に学ばせるように工夫すること」とされている。「地理」でも「生徒の特性や学校所在地の事情等を考慮し、地域調査を実施し、その方法が身に付くよう工夫すること」とされている。地域調査や文化遺産、博物館や資料館の調査・見学などを取り入れることが社会・地歴科の授業で期待されているのである。

そこで、この授業では、新座キャンパス近くの野火止用水の調査見学を授業時間内に実施した。事前に新座市発行の資料を配布し、見学後には新座市教育委員会発行の郷土教育資料などを参考に中学生向けの見学用教材を作成させた。また、博物館については受講生の日程調整が困難なため各自で都合のよい日に江戸東京博物館または埼玉県立歴史と民俗博物館の見学を行った。これも見学後に教材を作成しレポートを提出するようにした。このほか、公民的分野では裁判員制度の導入に伴い学校における法教育が推進されている。そこで東京地方裁判所の刑事裁判の傍聴を行った。こちらは、受講生の日程調整ができ、みんなで傍聴することができた。あわせて「文部科学省情報ひろば」の見学も行った。

「社会・地理歴史科教育法2」(後期)教材発表一覧(受講生10名)

	テーマ
A	かみ砕き観光学～観光研究と現代～
B	みんなで学ぼう世界遺産～紀伊山地の霊場と参詣道～
C	栃木県を知ろう 街歩き観光～足利編～
D	学問としての観光～観光人類学の観点から～
E	歴史の教科書に載せたい人は？
F	観光学ってなに？～ウエディング事業～
G	地域研究～熊谷まち歩きマップを作ろう～
H	10か月29か国世界一周
I	文化の違いに触れてみよう～色彩のとらえ方と社会～
J	フィンランドでの私の一日

Aは、日本の別荘史について宇治平等院や鷹狩り御殿、大名の下屋敷、房総を事例とした近代の別荘史を解説し、三重県鳥羽市における旅行業者と大学生が企画し商品化された旅行プランが紹介された。

Bは、日本の世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」について、和歌山県教育委員会発行の資料をもとに説明した。

Cは、栃木県足利市の街歩きをテーマに、日帰りプラン、街歩きの行程を作成し提示した。また、足利の観光地の紹介を行った。

Dは、自分が学んでいる観光人類学について中学生にも分かるよう説明し、観光を人類学の視点から考えるとともに、個人的な体験から観光と文化の関わりを説明した。

Eは、生徒に歴史教科書に載せるべき人物とその理由を考えさせる独創的な内容であった。

Fは、軽井沢におけるウエディング事業を事例として、ホテル、教会などのウエディング事業の拡大について時期別地図を作成した。現地のウエディング施設へのインタビューをもとにその特徴を把握し地域の産業や雇用へ大

きく影響していることが紹介された。

Gは、武蔵野銀行と立教大学観光学部が産学連携事業として実施した「埼玉地域交流フットパスプロジェクト」の一環として作成した「まち歩きMAP」を紹介し、自分の出身地である熊谷を事例として観光マップ作製の手順を紹介した。

Hは、文化人類学を学んでいる学生が、自ら休学して29か国を旅行した体験¹⁾を生かして、パワーポイントで外国の文化を具体的に紹介した。「お気に入り」「びっくり」「思い出の人」などのテーマを設け写真を提示した。この教材を使用し母校で講演した。

Iは、異文化について色彩の認識の違いから考えるユニークな教材で、日本の子どもとアフリカのボディ族の子どもの色彩認識の違いから、その背景を考えさせる発表であった。

Jは、夏季休暇を利用して滞在したフィンランドの学校生活について紹介した。現地の中学校で日本文化の紹介をした経験から、子どもたちの学校生活や家庭での食事、家族の生活時間など日本との違いが具体的に語られた。

【注】

- 1) 太田正行『『社会科・公民科教育特論Ⅰ』における模擬授業の導入について—学生の主体的な学習を促す『教科教育法』の授業の工夫—』（慶應義塾大学教職課程センター年報第13・14号2002-2003年度 2005年）
- 2) 太田正行「中学校・高等学校における社会科、地理・公民科の授業についての一考察—『社会科課外講座』受講生へのアンケート調査から—」（慶應義塾大学教職課程センター年報第12号2001年度2003年8月）
- 3) 国立教育政策研究所教育課程研究センター「平成15年度小・中学校教育課程実施状況調査『質問紙調査集計結果—社会—』」（2005年4月）
www.nier.go.jp/kaihatsu/katei_h15/index.htm
国立教育政策研究所教育課程研究センター「平成17年度高等学校教育課程実施状況調査『ペーパーテスト調査集計結果及び質問紙調査集計結果』」（2007年4月）
www.nier.go.jp/kaihatsu/katei_h17/index.htm
- 4) 放送大学教育振興会「教師教育教材『教育実習生の授業～その変容を見る～』—中学校社会科地理の例—」（メディア教材 DVDvideo）
- 5) 日本経済新聞2012年12月3日朝刊「自習・読書促す授業を」は、全国の大学生の生活実態調査結果より大学における参加型授業の充実や自主学習の重要性を指摘している。
- 6) 岡本伸之「観光学入門 ポスト・マス・ツーリズムの観光学」p24（2007年 有斐閣）
「社会科学のみならず、自然環境との共生の課題を想起すれば明らかであるように、自然科学、さらに、人びとを引き付けてやまない観光対象の多くが芸術や文化の領域に属することを考えると、人文科学の知識をも動員しなければならない」とあり、観光学が社会科や地理歴史科の学習内容と密接に関連することは明らかである。
- 7) 前田勇「現代観光総論 改訂新版」p6（2012年 学文社）
- 8) 立教大学観光学部「学部案内2013」p8
- 9) 文部科学省 中学校学習指導要領解説「社会編」平成20年9月
- 10) 文部科学省 高等学校学習指導要領解説「地理歴史編」平成22年6月
- 11) 2011年度「学生による授業評価アンケート」報告書（立教大学 2012年9月）によると、「わたしは、旅行することが好きだ」の平均値は4.5（最高値は5）で極めて高くなっており、観光学部の学生は「旅好き」であることが分かる。